

3 障害特性に応じた支援の内容と方法

社会性やコミュニケーションなどに関する特別なニーズを有する広汎性発達障害の子どもには、その特性に応じた支援の内容と方法が要求される。アセスメントを基に、それぞれの子どもについて個別の指導計画を作成し、支援の方向性を明確にする必要がある。

(1) 目標の設定

個別の指導計画においては、本人や保護者の思いや願い、障害に起因する困難性や課題、取り巻く環境などを総合的に情報収集、分析して設定した長期及び短期目標が重要なポイントになる。これらの目標を達成するために、図2のような観点から分析し、具体的要素に沿って細かな支援を行うことが重要である。

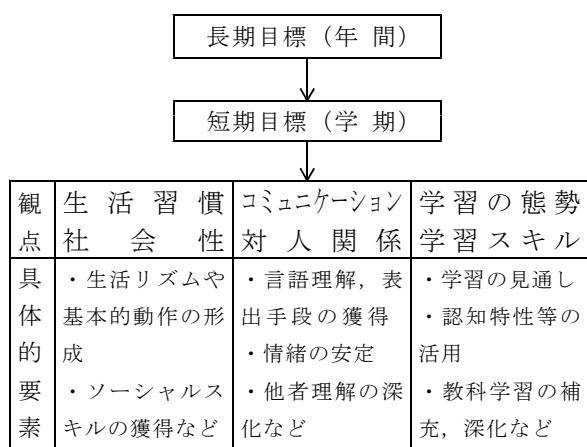


図2 目標達成のための観点と具体的要素

(2) 具体的な手だての検討

ア 生活習慣，社会性について

日常生活習慣の確立のためには、生活の流れに沿い実際的な状況下で、具体的な支援の継続が必要である。特に、

心理的な安定を促し固執性が目立たないように配慮しながら、衣服の着脱や食事、係の仕事などに関する諸技能を身に付けるようにしたい。

また、社会性に関する支援に当たっては、人とのかかわり方等に関する一般的なソーシャルスキルの視点だけではなく、広汎性発達障害の子どもの特有の感じ方や文化を尊重する必要がある。一人一人の状況に十分配慮しながら、それを理解し、活用し、成功する体験を積み重ねたい。

イ コミュニケーション，対人関係について

コミュニケーション能力を高めるためには、言語だけでなく動作や絵カードを活用する等、子どもにとって困難性の少ない手段による配慮や支援が必要である。また、人の声に注意を向ける、人の話を聞く、返事やあいさつをするなど、人とのかかわりを深めるための基礎づくりが重要である。

さらに、対人的に過剰な敏感さや回避的な感情に配慮しながら、教師等との情動を共有する経験を重ねることで、人間的な触れ合いを深め、集団生活に円滑に参加できるような状況づくりに心掛けたい。

ウ 学習の態勢，学習スキルについて

安定した状態で意欲的に学習に取り組むためには、子どもにとって分かりやすい目的と見通しが必要になる。生活に結び付いた実際的な状況下で興味・関心を生かした学習課題を設定したい。

特に、視覚的情報処理の優位性や種々の感覚を同時に処理することの困難性などを考慮した教材・教具の工夫が、日ごろの教科学習等を進める際に重要である。

以上のような支援に関して、仁平(2005)は、広汎性発達障害（自閉症）の子どもにかかわる教師の基本姿勢をアクロニム（頭字語）として、次のようにまとめている。

<p>自閉症児・者への対応の基本姿勢</p> <p>「よ・い・か・た・ち」</p> <p>よこくで みとおし （予告で見通し）</p> <p>いうより みせて （言うより見せて）</p> <p>かんたん めいりょう （簡単明瞭）</p> <p>たのしいこだわり みまもって （楽しいこだわり見守って）</p> <p>ちいさなルール つみかさね （小さなルールの積み重ね）</p>

4 実践例

ここでは、以上のような基本的な考え方を基にした実践例を紹介する。

事例：A児 小学校2年 情緒障害特殊学級
在籍 広汎性発達障害の診断あり

(1) 主な実態と課題

I Q 56 (W I S C - III), S Q 61 (S - M 社会生活能力検査), 苦手な活動には意識が向かず取組も消極的である。特に、偏食が強く、ご飯と肉だけしか食べない。給食の前後には情緒が不安定になり、奇声をあげたり自傷があったりする。

(2) 目標の設定

長期的には周りの人と楽しさを共有したり、支援を受け入れたりする柔軟性を身に付けることを目標に設定した。給食についてはいろいろな味に慣れ、食べる楽しさが感じられることを目指した。

(3) 具体的な手だて

給食に関しては、表2のような個別の指導計画を作成し、三つの観点に基づく具体的な手だてを設定し、支援を行った。

表2 A児への具体的な手だて

目標	観 点	具 体 的 な 手 だ て
いろいろな味に慣れ楽しく食べる	生活習慣 社会性	<ul style="list-style-type: none"> 朝の会で本日の給食メニューを視覚的に確認する。 個人用の食べやすい食器とスプーンを準備する。 保護者との連絡を密にして、家庭での食に関する成功体験も積むことができるようにする。
	コミュニケーション 対人関係	<ul style="list-style-type: none"> 意思表示用の絵・文字カードを準備する。（「半分にしてください」、「一口食べます」など） 給食の前に担任とわらべ歌遊びや散歩をする。 周りの友達に食べる際のモデルになってもらう。
学習の態度 学習スキル	学習の姿勢	<ul style="list-style-type: none"> 教室の中に給食用の特別なスペースを確保する。 食器や牛乳の箱に好きなキャラクターの絵をはる。
	学習スキル	<ul style="list-style-type: none"> 食べる前に量を選択させ、食べ終わった後に見える形で評価をする。

(4) 結果と考察

1年間の実践を通して、A児が安心して食べられる環境と、本人の食べたいという要求が引き出せるような担任との関係をつくりだしてきた。その中で、偏食が徐々に改善され、他の学習活動にも安定して取り組めるようになった。A児の特性を生かしながら家庭との連携を深めたことも、効果的であったと思われる。

このように、広汎性発達障害の子どもによりよい理解と支援につながる十分なアセスメントや適切な目標、内容、方法を含んだ丁寧な個別の指導計画の作成と実践が重要である。今後、子ども一人一人の教育的ニーズにこたえるために、長期的な展望をもった質の高い専門性を身に付けることが求められる。

【参考文献】

杉山登志郎「自閉症児の発達と指導」2001年全障研出版部
仁平説子「自閉症とアスペルガー症候群の対応のためのアクロニム」2005年 日本発達障害学会発表論文集

(特別支援教育研修課)